

佳作

手紙

茨城県 友部町立友部小学校三年 森 真由華

「さとしのへやをかたづけしていたら、こんなものが見つかったな。これは、あったかい心がつまっているから、すてられんわ。」

と、おばあちゃんが言いました。さとしは、わたしの兄です。わたしは、なんだろうとふしぎに思っ
て見てみると、それは、あつみのある大きなふうとうでした。表には、えんびつで、「もりさとしくんへ」と書いてあって、よこにドラえものの絵がえがいてありました。中をのぞいてみると、作文よう紙が入っていました。一まいとり出して読んでみました。

「さとしくん、ぐあいはどうですか。はやくよくなるといいですね。今、げきのれんしゅうをしています。さとしくんのせりふは、かわりにせ
いちゃんがやっています。…」

ふうとうの中みは、ぜんぶさとし兄ちゃんへのお手紙だったのです。

「さとし兄ちゃんは、小さいころ体が弱くてねえ。おばあちゃんが一時きせわをしていたのよ。小学校二年生のとき、はいえんになって、しばらく入いんしてねえ。そのとき、クラスの友だちが書いてとどけてくれた手紙なんだよ。そうだねえ、今から十四年も前の、まゆかが生まれていないころのことだけだね。」

おばあちゃんは、昔をなつかしむように目を細めながら言いました。わたしは、手紙を一まい一まいめくって読んでみました。どの手紙にも、心のことつたはげましの言葉が書いてありました。また、かわいい絵もそえてありました。

「兄ちゃんは、心のやさしい先生や友だちにかこまれていたんだね。友だちっていいねえ。」

と、わたしは、おばあちゃんにむかって言いました。おばあちゃんも、

「本当にそうだねえ。」
とつぶやきました。そういえば、わたしも二年生のとき、病院で入いんしていた竹内くんにおみまいの手紙を書いたつけなあ、と思いい出しました。わたしは、これからも、病気の友だちやこまっている友だちに出会ったら、やさしい気もちでせつしていきたいです。おばあちゃんは、あたたかい心のいっぴいつまっている、この手紙をいつまでも大せつにのこしていくんだらうなあ、と思っています。

